

## 書評

どもに与えること」である。いわば不平等な扱いによる実質的平等の結実、といえるかもしれない。だが、それが可能となるためには、教師の側の社会的価値規範、すなわち「同じことを、同じやり方で、同時に」という教育のエートス自体が変わらなければならないと思われる。現在、強者の論理で成立している教育学理論の、弱者の論理への発想の転換（今風にいえば「脱出」）が要求される。

本研究のエスノグラフィーという研究手法における革新性はいうまでもない。

第1に、「変貌」という時系列的なアプローチに、この手法が用いられていること。エスノグラフィーは元来、文化人類学におけるフィールドワークに見られるように、日常生活の秩序成立の基盤分析の方法において有効である。しかし、本書では、変革の中での組織における秩序形成への働きかけを分析している。第2に、この手法の特徴でもあろうが、敢えて自己解釈は避けている点である。少なくとも禁欲している。それにより、観察者と現場教師との同化に成功している。第3に、教育現場におけるエスノグ

ラフィーの特異性に触れている点。中立的な立場で同じ目線に立とうとするのは、観察者たる研究者の傲慢とし、教師との協働的エスノグラフィーの模索を提言している。

昨今、現職教師が相当数大学院に在籍するようになった。本共同研究のように教育現場と研究室が結ばれることにより、エスノグラフィー的な研究スタイルがさらに追加され、総体として研究の質的な変化がもたらされるだろう。

本書で取り上げられた4つのフィールドは、新しい取り組みに積極的という意味で、教育界においてマイナーな事例かもしれない。たしかに、特殊から特化し、一般化するというのも一つの研究方法である。だが、より一般的な学校での教師の言動などからの、学校の普遍性（らしさ）の分析も望みたい。

「小学校が子どもの居場所のある場所でなければならない」。筆者たちのこの研究スタンスが、教師との協働的エスノグラフィーの端緒なのであろう。

◆四六判 216頁 本体2,000円  
有信堂

## ■ 書 評 ■

新堀 通也 [編]

『夜間大学院—社会人の自己再構築—』

神戸大学 川嶋太津夫

本書は社会人を対象とした大学院である「夜間大学院」に研究のメスをいれたもので、「学部の延長としての純粹培養的な伝統的大学院」や同じく社会人大学

院である「昼夜開講制大学院」と比較して、「夜間大学院」が「社会人大学院の典型であり、純粹型、あるいは（ウェーバーの語を使えば）理想型」であること

を(13頁)、さまざまなデータ、調査結果、大学院生の自分史を用いながら検証し、「夜間大学院ならびにその院生(または潜在的志願者)に対する行政的、財政的、制度的な支援の充実」(207-208頁)を提言している。と同時に、著者の勤務する夜間制大学院である武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科の、いわば自己点検・自己評価報告書の役割も果たしている。

大きく3部から構成されている本書を、それぞれ簡単に紹介しよう。まず第I部「研究の概要」では、社会人大学院のメリットとして、社会人院生の多くが定職を持っているため、卒業後の就職を心配することなく学習・研究に専念できること、また職業上の「現場」や社会的な「現実」がかかえる問題への解決策を求めて大学院にやってくる院生の期待に応えるためには、伝統的な学問分野を基礎とした教育研究ではなく、理論と実践とが結合し、複数の学問分野に基づいた新しい学問分野、学際的な教育研究が必要かつ可能になることがあげられている。そして、夜間大学院の特徴として、大学院全体の中でのシェアが低いこと、社会人を主な対象としていること、専門職養成を目指したプロフェッショナル・スクールの性格を強く持っていること、そして独立研究科・専攻といった新しいタイプの大学院であること、などが指摘されている。

第II部「夜間大学院の特徴—昼夜開講制との比較—」では、夜間大学院を、同じ社会人を対象としている昼夜開講制の大学院と比較して、入試倍率、歩止まり

率、社会人占有率、そして夜間開講度の諸点において、夜間大学院のほうが「はるかに(社会人の)生活のスタイルにマッチした大学院であることは明瞭であ」り(57頁)、社会人大学院の「純粋型」であることを明らかにしている。また夜間大学院の制度的特徴としては、設立時期が新しいこと、規模が小さいこと、領域に偏りがあること、そして私立大学に多いこと。入学者の特性としては、学校、企業、官公庁在職者が多いこと、年齢層は幅広いこと、女性の比率が他の形態に比して相対的に高いこと、そして他大学出身者が多く同系繁殖傾向が小さいこと、などが強調されている。

そして最後の第III部「『自分史』による夜間大学院評価」では、著者の勤務する武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科の、自己点検・自己評価として夜間大学院の実態や問題点を明らかにするために、志願者や入学者の年齢、現職、出身大学・学部についての定量的な分析が行われている。さらに「入学者の内的な心理や意識、また彼らの個人的な生活などを、彼ら自ら語ってもらうことによって、もっと人間的な実態を明らか」(114頁)にするために、69名の院生の「大学院入学による自己変容」という「自分史」を用いて、大学院の点検と評価が試みられている。後者の分析によって明らかになった69名の共通性は年齢、学歴、職歴の「多様性」であって、現在の職業、職歴が多様なだけでなく、同じ個人でもこれまでの職業歴が多様であることが特性で、前者を「ヨコの多様性」、後者を「タテの多様性」と命名している

が、これは、かつて2種類の学歴主義を「タテの学歴主義」と「ヨコの学歴主義」と名づけた著者らしい観点である(125頁)。そして彼らは、「自分さがしの旅」における壁と「職歴」における壁を乗り越えるために大学院へ進学し(159頁)、資格取得やカリキュラムに不満を感じつつも、多くは大学院への進学を「肯定的にとらえ、満足感」を述べている(185頁)。このように「自分史」は、「同一のフォームによる質問紙調査の統計的結果から得られない実態を示してくれる」(205頁)ので、「夜間大学院の自己評価、自己点検にとって貴重な方法である」と、著者はその手法を高く評価している(203頁)。

このように本書は、「夜間大学院」という新しいタイプの大学院について、多様な分析を試み、社会人向けの大学院として夜間大学院が最適であること、そして、大学や大学院の自己点検・自己評価として、学生の「自分史」の分析が有効である、ことを明らかにしている。後者に関しては、これまで多くの大学が公表してきた「自己点検・自己評価報告書」が、単に現状を記述しただけで「点検あって、評価無し」と批判されてきただけに、それを是正し、補う手段として学生の声に耳を傾け、それを定性的に分析することの必要性・重要性を主張する著者の考えに賛同する。しかし、前者の点、すなわち昼夜開講制の大学院に比べて、夜間大学院こそが社会人大学院の「理想型」であるという主張に関しては、疑義を感じる。というのも、くしくも著者が指摘するように、社会人の生活

パターンはまさに「多様」であって、全ての社会人が「夜間」に大学院へ通学できるとは限らないからである。まさに夜間開講を「制度化」したが故に、その制度に「救われた」社会人も多いが、逆にその制度から「締め出された」社会人も現れるのである。たとえば、大学院の入学試験時に全日制の教員であった人が、入学後定時制高校へ配置転換になった場合、その人は夜間大学院へ通学することが可能だろうか。昼夜開講制の大学院であれば、この人の大学院での学習は制度上可能である。しかし、夜間のみを開講することが制度化されている夜間大学院では、それは制度上不可能である。だとすれば、「タテ」にも「ヨコ」にも「多様性」を示す社会人にとって、どちらの制度がより適しているのだろうか。

ではなぜ著者は、夜間大学院を社会人大学院の「純粋型」「理想型」とまで評価するのだろうか。その理由を知るためには、著者のこれまでの「研究史」をたどり、その原点にまで遡らざるを得ないだろう。周知のように、著者は、わが国における教育社会学研究の先駆者の一人として、従前より日本社会の「学歴身分制」を鋭く批判してきた。そして、学歴競争の勝利者たちは、大学に単に肩書きだけを求め、勉強や学問への意欲や喜びをなくしてしまっていると強く批判している(『学歴—実力主義を阻むもの—』)。それに対して、夜間大学院の学生は、仕事をしつつ学ぶという大きな制約の中で、個人的・職業的な壁を乗り越えようと、強い意志と意欲をもって進学してきた人たちであり、また学歴上も高卒